

ファシリテーションと時間感覚：ひらける

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 富永, 良史 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/8396

ファシリテーションと時間感覚

ひらける

富永 良史

私の物語を紡ぐ。
事実とも論とも呼ばず、物語と呼ぶ。

私の日常に、事実はあるのかもしれないが
過ぎた事実を、私が想起し、関係づければ
それは事実であることをやめ、私の物語になる。

見方を変えれば、見え方が変わる。
事実も論も、そのありようは
うつろう可能性に、ひらけている。
だからここでは、すべてを物語と呼ぶ。

過ぎた過去が
定まった事実ではなく
様々なありようを持つ物語である時
私は、そこに希望を見出す。

私の物語は
福井大学教職大学院を舞台とし
ファシリテーションと時間感覚が語られる。

緒. はじまり

小学生の頃の記憶。
朝ご飯を食べた後、登校するまでのわずかな時間。
居間で家族とテレビのニュースを見ていた。

政治の話題だっただろうか。
「3年後を目処に、実現する見込みです」
のようなことが語られていた。

言葉の細部は定かではない。
「3年後」「実現」という言葉が
今も耳に残っている。

小学生の私にとって、「3年後」を見通すなどという
ことは、想像を遥かにこえていて、無限のかなたに
思えた。「3年後」は、夢として語るべき時間であっ
て「実現」という確かさで語るべき時間ではなかつ
た。

30代の父母と、50代の祖父母
そして、幼稚園児の弟が、そこにはいた。

私にとって何の現実感もない「3年後」を
父母、祖父母は、当たり前のこととして受けとめた。

弟は、その耳に届いていたかも怪しい。
受けとめ方との対照が、思い出される。

あれから30年以上がたち、無限のかなただった「3
年後」という時間は、当時とは比べものにならない現
実感を持っている。私の中では、年齢を重ねながら、
時間にまつわる感覚が育まれていた。

時間感覚。
時間の長さや速さについての個人的な感覚。
現実の捉え方を、もしかしたら
深いところで支えている感覚。

時間感覚などという言葉は、私がこれまで過ごした
時間の過半において、使ったことも意識に浮かんだこ
ともなかった。私の年齢が、社会の中でちょうど中間
あたりに位置するようになり、回りに年下の人が増え
てきたと感じはじめた頃、この言葉が意識に浮かぶよ
うになった。

私はこれまで、同じ現実を目の前にして様々な受け
とめ方があるのは、当たり前であり、価値観であり、
立場の違いであると素朴に考えてきたが、その背後に
ある時間にまつわる感覚の違いが気になりはじめた。

過ごした時間の長さや内実の差が生み出す考え方の
差に、思いを巡らせるようになった。対話のファシリ
テーターを仕事としている私は、必然的に、時間感覚
が対話に影響を与えていると考えるようになった。

今すぐの成果にこだわる人に
深遠を見通すことは難しい。
過ぎ去った失態への後悔から逃れられぬ人に
未来を力強く語ることは難しい。

時間を長く、広く、やわらかく捉えるのか
短く、狭く、固く捉えるのかによって
対話は深くもなり、浅くもなる。

大げさに言えば、ファシリテーターとしての私は、
対話における時間の流れを司る。そのことに思い至っ
た時、私が持っている時間感覚を問いなおさざるをえ
なくなった。このような思いに導かれて、ファシリテ
ーションと時間感覚にまつわる私の物語は紡がれる。

私のファシリテーターとしての時間感覚は、福井大学教職大学院というコミュニティの中で、特に自覚され、深められた。私は、4年前、このコミュニティの新参者として迎え入れられ、以来、そこが私の物語の舞台となる。

この物語は
その舞台を概観することから
はじまる。

舞台1．福井大学教職大学院

このコミュニティには膨大な物語が蓄積されている。製本された物語が書棚を埋め尽くしている。物語は、ここに集った学び手によって紡がれた。学び手は、教師を志す若者であり学校を支える現職教員であった。

学び手が、学校現場で、子どもたちと向きあいながら喜び、迷い、苦しみ、見つめ、考え、乗り越えてきたひとつとして同じでない物語。学び手は「院生」と呼ばれ、物語は「長期実践報告」と呼ばれる。

このコミュニティには物語の聴き手がいる。院生の紡ぐ物語を、時にその断片を受けとめ、見つめ、語りあい、ともに意味をひらいていく聴き手がいる。一般的には大学院教員と呼ばれ、コミュニティの内部では「スタッフ」と呼ばれる。スタッフは、全国の多様なフィールドから集う。研究者に限らず、学校現場、経営の現場からも集う。

このコミュニティの空気は、入れ替わり続ける。院生がスタッフ、新しい空気を持ち込み、混じりあい、何かを残して巣立っていく。院生やスタッフが入れ替わり、そして空気が入れ替わってもこのコミュニティの中心には物語がある。ともに語り、聴き、紡がれる物語がある。

スタッフは、毎月、少人数の院生とテーブルを囲む。院生たちの実践と省察の物語に深く耳を傾ける。院生同士の対話をファシリテートし、学びあう。この対話は「カフェランス」と呼ばれる。

夏と冬、集中的に学びに没入する期間がある。読み、省察し、対話し、物語を紡ぎ続ける期間。この没入の期間は「集中講座」と呼ばれる。

スタッフは、いつでも院生の実践の現場に向かう。学校現場という院生の物語が生まれる場に向き、実践を目の当たりにし、省察をともにする。物語が生まれる現場は「拠点校、連携校」と呼ばれスタッフが現場に向いて省察をともにする形は「学校拠点方式」と呼ばれる。

このコミュニティには、年に2回、全国から学びを求めて仲間が集う。互いの実践と省察の物語を対話す

る場が開かれる。そこでは、都道府県を超え、仕事の違いを超え、経験の長さを超え、あらゆるものを超えて、対話がひろがり、互いの物語に意味を生み出しあう。この場は「ラウンドテーブル」と呼ばれる。

このコミュニティでは、院生と等しく、スタッフにも、物語を読み、省察し、自らの物語を紡ぎ、公にすることが求められる。スタッフは毎週、スタッフ同士の研究会に集う。院生らの物語を読み解き、その読み解き方を対話し、自らの実践と省察の物語を対話する。研究会は「火曜5限」「FD」と呼ばれる。正式な名称はあるが、誰も呼ばない。研究会を繰り返す中で、スタッフは、院生の学びを支える者である前に自らがまず、良き学び手であろうとしていく。

スタッフが紡ぐ自らの物語の数々は、論文集「教師教育研究」として公開される。私が紡ぎはじめたこの物語も、その一部をなす。

このようにして、このコミュニティは営まれる。中心にはいつも物語がある。

時間1：視界がひらける

ここに語った福井大学教職大学院の姿は
私の視界に捉えられたものであって
仮に真実の姿があるとしても
それを伝えるものではない。

私の視界に捉えられたその姿は
はじめからこのような形をしていたわけではない。

このコミュニティの中での時間が
流れれば流れるほど、視界が広がり
その姿、全体像が目前にひらけてきた。

長い時間の流れの中のある時点において
自分に見えているものが、確かなものであるという
受けとめ方は、早急に過ぎる。

自分の見方、見え方は
それまで自分に流れた時間の中で
ひらかれたものであって、常に途上にある。

見つめるものの真実の姿を捉えることは出来ず
視界がひらけていくに従い、見え方もまたひらける。
この関係を謙虚に受けとめるほかはない。

謙虚さを忘れた時
対話のファシリテーションは硬直し
あいまいな意味をすくいとれなくなる。

舞台2．自分ではない誰かの物語

スタッフとしての私は、毎年、いくつかの長期実践報告を読み解く。かつての院生が紡いだ学校における

実践と省察の物語。そこには、時間の流れがあり、出来事の連なりがあり、感情の揺れ動きがあり、思考の深化がある。幼少期までを視野におさめた長い時間の省察も珍しくはない。

読み解いた物語をレポートにまとめ、火曜5限のFDで報告する。5人程度の小グループに分かれたスタッフが、それぞれに読み解いた物語の構造を、展開を、意味を、時に、そこから想起される自分自身の体験を語り、聴きあう。誰かが読み解いた誰かの物語は、そのスタッフの思考と語りを介してあらたな意味を帯び、聴き手である別のスタッフの中でさらに新たな意味へと展開する。

自分ではない誰かの物語を読み解き、仲間に語る経験。自分ではない誰かの物語を読み解いた仲間の語りに耳を傾ける経験。これらの経験を通じて、私の中に、多様な時間の流れが貯えられていく。自分ひとりで生きられる時間など、たかが知れているが、このような物語を読み解き、語り聴きあう場の中で、私は、ひとりの限界をはるかに超えて豊穡な時間を追体験し、自分の中に貯える。42歳になる私の中には、42年の実体験をはるかに超える時間の流れが貯えられる。

時間2．流れる速度が落ちる

私の中に貯えられる時間の流れの多様さが増すほどに瞬間に流れる時間は、その速度を落とす。

次々と生じるあれやこれやの出来事は
大きなゆったりとした流れの中の一コマとして
こまやかに受けとめられる。

年齢を重ねると月日が経つのが速い、と言われる。
それとは、違った意味で時間の速度が落ちる。
目の前に生じるあれこれが、細やかに見つめられる。

自分の生きた時間の総量ではなく
自分が追体験した多様な時間の総量が
影響するのかもしれない。

私の中に貯えられた時間の総量が
私の実体験の総量と大差がなかった頃
私の日常に流れる時間は、目まぐるしかった。
例えば幼少期は、まさにそのように時間が流れた。

対話のファシリテーションをしている時
一瞬一瞬に生起する感情や論理や、合意や対立を
繊細に感じ取らなければいけない。

しかし、ひとつひとつに即座に反応しては
対話を動かしている大きな流れを見失う。

そこに生起するあれやこれやは
ひとつひとつに、表情があり、温度があり
それらを感じながら、ゆったりと受けとめることで
次への展開がひらかれる。

起きたあれやこれやを、結びつけることを急がず
自ずと意味が浮かび、関係の糸の先が触れあい
紡がれていくのを待つ。

多様な時間の流れを貯えているからこそ
落ち着いて見つめていられる。

舞台3．日常のリアルを伝える物語の断片

スタッフとしての私は、毎月行われるカンファレンスと、夏と冬の集中講座で、小グループのファシリテーターを務める。ここでは、小学校も中学校も高校も特別支援校も、境を超えて、互いの日常の実践と省察を語り、聴きあう。集中講座では特に、精緻な理論書を読み解き、学問的な理論とこれまでの実践の間に架橋を試みる。ファシリテーターとして、院生同士が、互いの多様さを交わらせながら、交わりの中に新たな意味が生まれるのを促す。

院生は時に、つい最近の生々しい出来事とそこに生じた感情、後になされた省察を語る。それは、あまりに鮮度が高いため、あちこちがほころび、断片的で、だからこそ、現場のリアリティを浮かび上がらせる。私たちの日常が、整合性やバランスではなく、矛盾やアンバランスを主旋律として営まれていることを思い起こさせる。

カンファレンスや集中講座は、院生の物語の断片、素材がテーブルに並べ置かれ、それを囲む仲間がともにその意味とつながりを見だしあうような場。ある院生の語る物語の断片は、別の院生の語る物語の断片と出会い、結びつき、共通項が浮かび、いずれの院生にとっても、自分の物語の新たな意味がひらける。特別支援学校と高等学校と小学校の中にある異なる物語が、ここで出会ったからこそ、それぞれに触発しあい、意味を見出しあえる。

異なる場所の異なる物語が出会い新たな意味が生まれる時、私たちが、より大きな場所、より大きな時間を、確かに共有しているという感覚もまた生まれる。校種は違っても、誰もが、次世代を担う子どもたちの学びを支えるために日々を営み、次の社会とはどのようなものであるかを考え続ける大きな物語の中に、私たちはいる。

時間3．新たな意味が引き出される

物語の断片が出会い、結びつき、意味がひらける場を
繰り返し経験していくにつれて
過ぎた時間についての眼差しが変わる。

過ぎた時間は取り戻せないけれど
過ぎた時間に含まれる意味は変容する。

自分の過去に含まれる意味が変容する時

今この瞬間の受けとめ方も変容し
先にひらける未来への見通しも変容する。

過ぎた間に含まれる意味の変容は
自分のありようそのものの変容に等しい。

対話は、自らを変容する存在として
受け入れることなしには成り立たない。

自分の中に過ぎた時間の意味を固定し
自分の変容を拒むならば
対立やすれ違いに行き着かざるをえない。

変容する存在としての自分を受け入れるからこそ
自分の中に過ぎた時間と
他者の中に過ぎた時間が対話を通じて交わり
新たな意味を生み出せる。

過ぎた時間は取り戻せないという無念さは
それを省察し続ける限りにおいて
豊かな意味を引き出しうるといふ希望へひらける。
その希望は、対話の可能性に等しい。

舞台4．物語が生まれる現場で脱皮する

スタッフとしての私は、カンファレンスや集中講座で語られる院生の実践の現場に向く。拠点校、連携校を訪問し、授業実践の現場を参観し、事後の研究会をともにする。今まさに体感した授業実践について語りあう。大学院の部屋の中で語りあう時にはない感覚がある。大学院がスタッフとしての自分の現場だとするならば、拠点校と連携校は、院生の現場。自分の現場を離れて、相手の現場に入り込むことで、カンファレンスや夏期集中講座で受けとめた院生の物語が、血肉を持って浮かび上がる。

誰しも自分の現場に身を置く時の方が、自然に、いつもの調子で言葉を紡げる。院生は、いつもの現場で、いつもの言葉で、実践を語り、ふりかえる。スタッフとしての私は、いつもと違う、相手の現場の中で、血肉を持った物語に耳を傾け、いつもと違う言葉を紡いでいく。

相手の現場に向き、体感し、対話することは、私の感覚を揺さぶる。思考や言葉には、いつもの現場にとどまれば、いつもの調子に固定化していく慣性がある。自分の現場から離れる時、その慣性から自由になり、新たな思考や言葉がひらけてくる。相手の懐に飛び込むことで生まれる、これまでの自分からのささやかな脱皮。拠点校、連携校を訪ねながら、私はささやかな脱皮を繰り返す。

時間4．今ここに身を投げ出す

誰もが「これまで」の時間の流れの慣性に
多少なりとも影響を受けながら

「今ここ」を営んでいる。

対話を豊かにするためには
「これまで」が持つ慣性から自由になって
「これまで」の自分を保留して
場に臨まねばならない。

ファシリテーターが
自らの「これまで」にとらわれる時
その場は、しなやかさをもち得ない。

対話する今ここに流れる
一回限りの、固有の時間の流れの中に
自らの身を置くことが求められる。

「これまで」の自分を放擲して
今この場に、身を投げ出すように。

自分の現場を離れ、相手の現場に飛び込み
そこにある多様な時間の流れを体感する経験を
積み重ねていくことで

今ここに身を投げ出す軽やかさが生まれる。

舞台5．コミュニティの物語が浮かぶ

毎年3月と6月、2日間にわたるラウンドテーブルが開かれる。福井大学教職大学院の学びのありようを全国にひらき出す場。多様なフィールドからの参加者が、実践と省察の物語を携えて、集う。1日目は、4つのゾーンにわかれる。ポスター発表で幕を開け、シンポジウムでの問題提起を経て、小グループでの対話へと問いが深められていく。ゾーンは、A.学校、B.教師教育、C.コミュニティ、D.授業、と冠される。2日目は、ゾーンを超えて、分野を超えて、小グループでの対話がひらかれていく。

スタッフとしての私は、数ヶ月前から企画の営みに参加する。初めて参加した時は、視界がひらけず、全貌をつかむことなく、「自分はいつ、どこで何をすればいいのか」の確認に終始した。回を重ねるにつれて、視界がひらけ、より良い場にするためのアイデアが自分の中に生まれるようにもなった。最近の3回は、ゾーンDのコーディネーターを務めている。

毎年、新たなスタッフを迎え、幾人かが巣立ち、代謝しながら、このコミュニティのラウンドテーブルへ向けての歩みが、確かに深化しているのを感じる。スタッフひとりひとりの意欲がにじみ、意見が混ざりあい、混沌としながらも、ともに創りだす営みが絶えることなく深まっていく。

私の視界がひらけていく個人の変容についての物語が私の中に紡がれるのと同時に、このコミュニティの変容についての物語もまた、読み取れるようになってきた。私の中に断片として貯えられていたここでの出来事が、回を重ねるにつれて、つながりあい、とけあ

い、大きな物語へと紡がれていく。私が過ごしてきた4年間を視界にとらえた、このコミュニティの変容にまつわる大きな物語が浮かんでくる。

コミュニティの物語を捉えられるようになったのは、これまで幾多の物語を読み解いてきた経験と関係している。院生の長期実践報告をはじめ、そこには個人を超えた、自らが属する学校というコミュニティの姿が描かれる。コミュニティの物語の中に、自身の物語が位置づけられる重層的な物語を読み解き続けることを通じて、私自身の属するコミュニティの物語への視界はひらけてきた。

時間5．大きな流れの中に身を置く

自分の中を流れた固有の時間には
血肉の感触があり、それを揺るぎないものと
いつのまにか思い込んでしまう。

自分の中に流れる小さな時間ではなく
それが含まれる大きな時間の流れの中に
自らを位置づけ直す時にこそ
自己への狭いこだわりを手放し
他者との対話へ自分をひらいていくことができる。

自分の中に流れる時間が
それを含むコミュニティの時間に
支えられていることを知る時
他者の中に流れる時間もまた
それを含むコミュニティの時間に
支えられていることへの、想像力を生む。

対話に集うひとりひとりの他者が
自己を超えたコミュニティの時間の中で
今ここにいる自己を紡いできたことが、想像できる。

目の前の他者が、個としてあるのではなく
その背後にコミュニティの時間、固有の文脈を
貯えていることに思いを巡らせる時
互いを受容する力は強まり、対話は奥行きを増す。

舞台6．「私たち」に支えられる「私」

ラウンドテーブルの場で、福井大学教職大学院のスタッフは、全国から集った学びを求めて集う人たちを迎えるファシリテーターとなる。同じコミュニティに属する仲間とともに役割を果たしていく時、ともにコミュニティの物語を紡いでいる実感は、いつもに増して高まる。「それぞれ」が集って、ともに「ひとつ」を作り上げているのだと実感が高まる。

ゾーンDのコーディネーターを務める私の感覚は、回を重ねるにつれて変容してきている。「『私が』コーディネーターする」感覚から、「『私たちが』コーディネーターする」感覚へ。当日、現場でコーディネ

ネートするのは、「私ひとり」ではある。しかし、そこに立つ「私」の中には、それまでの企画の営みの中で、繰り返されてきた仲間との対話が貯えられている。「私」が発する一言一言は、そのような対話の貯えを源泉としている。「ひとりの私」は「たくさんの私たち」に支えられながらコーディネートする。

ラウンドテーブルは、私の言葉でいうなら、「これからの教育、学びをひらいていく」という使命を持つ。このような言葉に定まっているわけではないが、誰もがそれぞれの言葉で、ゆるやかに使命をわかちあい集う。使命をわかちあう全国から集った仲間との対話は、数百人の規模であっても響きあう。異なる現場で生まれ、紡がれてきた異なる物語を、教育の、学びの「これから」をひらく大きな物語として、仲間とともに紡ぎ直していくような壮大な感覚がある。その時、私は、ゾーンのコーディネーターでも、テーブルのファシリテーターでもなく、使命をともにする仲間の一人になる。

時間6．歩みゆく先を見つめる

明日の小さな成果を求めることも大事だが
それに終始しては、時間の流れはせわしくなく
視界は狭く閉ざされ、見失うものが多すぎる。

ずっと先の大きな使命を抱きながら
今ここに流れる時間に自分をひらいていく時
大きくゆったりとした時間の流れに乗れる。

大きくゆったりとした時間の流れの中で
使命を、歩みゆく先を見つめる時にこそ
小さな差異に、混乱に右往左往することなく
対話を深めていくことができる。

狭い自分を超えて
大きな使命に向けて進む時間の流れの中に
ファシリテーターとしての自分を位置づける。

舞台7．内部と外部の出会い、違和感

私が4年前、福井大学教職大学院に新参者として迎え入れたのと同じく、毎年、新しいスタッフが迎え入れられる。同時に、これまでのコミュニティの物語とともに紡いできたスタッフが巣立っていく。

カンファレンスやラウンドテーブルの場を、新しいスタッフとともにする時、これまで紡がれてきたコミュニティの物語の中で定まりつつあったことが、ゆるみ、ほぐれ、組み立て直される。新しいスタッフは、外部にあった者の捉え方でこのコミュニティを捉え、違和感や疑問を持ち、これまでのスタッフに投げかける。これまでのスタッフは、投げかけを受けとめ、あらためて自らが参加するこのコミュニティのありようへの問い直しを迫られる。

このコミュニティで時を過ごせば過ごす程、私の中には、その分の経験が、たとえ断片であるにせよ貯えられる。貯えられるにつれて、視界がひらけ、断片が結びつき、私の中にコミュニティの物語が立ち現れる。それは好ましいことでもあり、好ましからざることもある。経験を積んで何かが決まっていけば、モノゴトはスムーズに進むようになるし、力を発揮しやすくなる。一方で、定まりゆくコミュニティ特有のモノゴトのあり方は、問い直される機会を失う。自分のあり方に疑問や批判の目を向けることをしない自分自身に気づかなくなっていくだろう。そして成長が止まり、退化への道がひらかれる。

毎年、新しいスタッフを迎え、違和感や疑問を受けとめ、問い直し、語りあうことによって、福井大学教職大学院というコミュニティには、退化ではなく、成長と深化への道がひらかれているように見える。

福井大学教職大学院は、私が迎え入れられるはるか前から、多様な物語を迎え入れながら、ともに大きな物語を紡ぎあうコミュニティとして存続、成長してきたのだろう。私がここで過ごした4年間で、まさにそのような時間だったように。遠く大きな使命のもとで、内部と外部の差異が出会い、違和感と疑問を生み、そこから創造を育むことの繰り返しとして、私にとってのこの4年間はあった。

時間7．絶えざる問い直し

人が集って営みをともしする時
そこには、個々人の物語とともに
コミュニティの物語が生じていく。

閉じたコミュニティであれば
時間の経過とともに、その物語は強固になり
その展開には、定方向への慣性を得る。

コミュニティがその展開に慣性を許すなら
そのありようはしなやかさを失い
うつろい続ける外部との摩擦に敗れていくだろう。

個々の物語が、他者の物語との出会いによって
絶えざる変容にさらされるのと同様
コミュニティの物語も、外部との出会いによって
絶えざる問い直しにさらされなければならない。

大きな時間の流れは
新たに流れ込む小さくとも新鮮な流れに
耳を傾け、自らの流れを新たに作る覚悟で
合流していかねばならない。

対話において
自分の中にある時間の流れを、頑なに守るのでなく
変容へとひらいていけるかどうかは

自分がその一部をなすコミュニティの時間の流れを

保留し、絶えざる問い直しへと
ひらいていけるかどうか、にかかっている。

これまでのコミュニティの時間の流れを保留して
外部からやってきた差異を受けとめられるか。
相手のこれまでの時間の流れを尊重して
内部に営まれたこれまでの時間の流れを
これからの流れへと問い進められるか。

知らず知らずに貯えられた
自分の中の頑なさを直視し、ゆるめ
これからへと向けて解体、創造していけるか。

外部から違和を持ち込む他者を
自分を触発し、変容させる力の源として
受けとめられるか。

どこまでも変容しながらも
遠く高くに見据える目的を見失わずにいられるか。

自分とは異なるものとの出会いから生じる
違和感、わかりあえなさ、すれ違い、混沌。
この一見マイナスの感覚に可能性を見いだすことから
対話は、その深まりへ向けてひらけていく。

舞台8．誰もが「ここ」を物語る

福井大学教職大学院に集う人は誰もが、ここがどのような場なのかを、様々な言葉で、様々な物語を。スタッフであれ、院生であれ、集う誰もにとって、ここは物語る対象になる。そして、多くの人が、福井大学教職大学院ではなく「ここ」と称して物語る。

それはおそらく、このコミュニティが、あのようでもあり、このようでもあり、多様なありようを見せ続ける場であり、定まった名称が似つかわしくないように受けとめられているからではないか。少なくとも私にとっての「ここ」は、正式な名称を冠して定まった存在として扱うには、あまりにやわらかい、うつろい続ける場に映る。

スタッフの間で「火曜5限」「FD」と呼ばれ、正式な名称で呼ばれることのない定例の研究会も、おそらく、そのありようの流動性が、俗称でしか呼ばれない原因であるように思える。

福井大学教職大学院は、あえて乱暴な言い方をすれば、明確な計画や規則に従って運営される組織でもなければ、数値目標の達成に向けて駆動する組織でもない。「ここ」は、集う仲間によって絶えず紡がれる。「ここ」にまつわる物語によって、そのありようを生成し続けているコミュニティではないか。歩むべき先を遠く、大きく見据えつつも、そこへの歩み方を緻密に計画することによる安定よりも、生成し続けることによる柔軟を実現している場。私には、そのように見える。

時間8．生成し続ける

多様な物語に耳を傾け、自らの物語を紡ぎ
コミュニティの物語の中に身を置けば
時間の感覚はゆるみ、ひろがり、しなやかになる。

そのような時間の感覚は
豊かな対話への道をひらいてくれる。

だからこそ
福井大学教職大学院の中で時を過ごすことは
ファシリテーターとしての私にとって
重要な意味を持つ。

しかし
私にとって最も本質的な意味は
単に、このコミュニティの中で
与えられる時を過ごすことではなく
このコミュニティのありようそのもの
を生成する時を、仲間とともに過ごすことにある。

4年の時を経て
そのように思うようになった。

自らが多大な影響を受けるコミュニティの歩みを
生成する営みに自らも加わり、その営みの中で
自らのありようも生成し続ける。

このような生成の円環の中で
ファシリテーターとしての私は、ささやかながら
その力量を磨いてきたという実感がある。

生成のまっただ中にあることでこそ
あらかじめ定めた道を歩むのではない
生成する対話のファシリテーターを
志し続けることができる。

舞台9．教師教育研究

ここに紡いできた物語は、スタッフの物語を集めて
毎年刊行される「教師教育研究」に収録される。毎年
のことだが、毎年のことであるがゆえに、苦痛ととも
に自分の物語を紡ぎ出すことになる。否が応でも、こ
のこれまでに流れた時間の中にあるささやかな差異や
深化や、退化の跡を見つめる営みを、毎年、繰り返さ
ざるをえない。

これまで私は、自身の実践と省察にまつわる物語
を、1年にひとつずつ、あわせて3つ、紡いできた。
教師教育研究の執筆の時期がくるたびに、これまでに
紡いだ物語を読み返してきた。言葉によって凍結され
た過去が、読み返すたびに解凍されて浮かび上がる。
物語に描かれた内容だけでなく、それを紡いでいた当
時の自分のありようが浮かび上がる。何を感じ、考
え、迷いながら紡いでいたのかを思い出す。時に、自
分の成長を感じ、時に、安きに流れ退化した自分を感

じる。そこには、自分の中に流れた多様な時間の感触
がある。

同じ物語を読み返しても、浮かび上がる感触は、毎
年、異なる。その不出来と未熟に目を背けたくなるよ
うな感触が浮かんでいたはずの物語が、次に読み返せ
ば、そこには真摯で直線的な眼差しが浮かび、初心を
思い出させる。こうして自分の物語を、毎年読み返
し、紡ぎ続けることで、私の過去は変容し続ける。時
に深化であり、時に退化として。

過ぎ去り、定まり、取り返しのでない過去の上
に、今の私自身があるのではなく、貯えられ、その意
味がひとところに定まらない、変容する過去の想起、
物語の上にこそ、今の私自身がある。

時間9．還流する

過去の上に現在があり、現在の先に未来がある
という素朴な理解。

過ぎ去った時間を想起し、物語を紡ぎ続ける中で
過去、現在、未来についての、このような理解は
ゆるやかにほころびていく。

過去の想起の上に現在はあり
未来を展望する眼差しが異なれば
過去を照らし出す想起の光も異なる。

直線的に流れていく時間ではなく
還流するような時間の流れを感じる。

過去は過ぎては還る。
それを想起する限りにおいて。

未来は絶えず現在へと流れ込む。
それを受けとめる限りにおいて。

現在へと流れ込んだ未来は
瞬く間もなく過去へと流れさる。

そしてまた、想起の光のもとで
過去は現在に姿を現し、未来への展望を与え
未来がひらけて見える。

未来も現在も過去も
定まらず、うつろいゆきながらも
そこには、不安定への恐れではなく
変容への希望がある。

しなやかで豊かな対話を支えるのは
このような時間の感覚ではないか。

結．ひらける

福井大学教職大学院を舞台にした私のファシリテー
ションと時間感覚にまつわる物語に紡いできた。そこ

には、福井大学教職大学院での直接の経験を描いた章「舞台：1～9」と、そこから想起された時間感覚を描いた章「時間：1～9」が交互に置かれた。

経験の中で時間感覚が見出され、育ってきたと思いながら物語を進めてきた。書き進めるにつれて、舞台の章と時間の章の、どちらが先行しているか、わからなくなった。経験は時間感覚によって物語の形へと紡がれたようでもあり、しかし、時間感覚は経験の中でこそ育まれているようでもある。ふたつは円環の中にあるように思えてきた。

このような経験がなかったら、このような時間感覚はなかったし、しかし、このような時間感覚がなかったら、これまでの経験をこのような物語に紡ぐこともまた、なかっただろう。その関係は、閉じた円環ではなく、経験と時間感覚が相互に描きあい続ける、ひらけた円環、螺旋のようにも見える。

私の経験と時間感覚は、互いにひらかれ、影響を与えあいながら、互いの意味を生み出し続ける。ただし、私がそれを、省察し物語として紡ぐことを試み続ける限りにおいて。

○

ここまでの物語を紡いだ翌日、スタッフとしての私は、定例のカンファレンスに臨んだ。3人の院生と、2人のスタッフでテーブルを囲み、学校現場における協働研究の現状とこれからの展望を対話した。

昨日まで紡ぎ続けていた物語の影響だろうか、院生や、もう一人のスタッフが語る言葉の背後に流れる時間への意識がいつもよりも鮮明に感じられた。

「確かに自分が紡いできた物語のような時間の感覚がここにはあるし、その感覚に導かれて、今ここで、対話をファシリテートしている」と思えた。昨日まで紡いできた物語と、今日の現場との重なりあいを感じる瞬間があった。一方で「どこかが違う。いわく言いがたい感覚を、乱暴に言葉にしてしまった。今ここにある、この活き活きとしたファシリテーションをすくいとる損ねた」とも思えた。昨日まで紡いできた物語と、今日の現場との乖離を感じる瞬間があった。

私は、自分のファシリテーションにおける時間感覚を物語るのに失敗していることを、今日の現場で理解した。少なくとも部分的にしか成功していない。そしておそらく、この物語のどの部分が成功で、どの部分が失敗なのかは、私がこの物語を読み返すたびに少しずつつつろっていくだろう。これまで私が「教師教育研究」のために紡いできた3つの物語も、読み返すたびにその様相を変えてきたように。

しかし、この物語を紡いでいなかったら、自分のファシリテーションと時間の感覚について、このように問い進めることはできなかったし、より深く見つけよ

うという意志を持たなかったであろうことは、確かに言える。この物語を紡ぐことによって、私の前には、自らの感覚を見つめ、さらに深めるための道がひらけた。

私はここまで、自身の経験と感覚のありようをすくいとるながら物語を紡ぎ、私自身にとって、次の一步を踏み出すよすがになればと願ってきた。少し欲を出すならば、この滑稽な堂々巡りにも似た物語とそれへの取り組みが、読む人に何らかの触発を与えはしないだろうかと思いもした。

このような願いのもとに紡がれた私の物語もまた、福井大学教職大学院という、ともに語りあうことによってそのありようが生成され続けるコミュニティの時間の流れに呑み込まれていく。その大きな時間の流れの中で、私の物語が含む意味や願いは、読み手、語り手、聴き手の中へとひらかれ、様々に変容し、展開していくだろう。私がどのようなつもりでこの物語を紡いだにせよ、そこに含まれる意味や願いが、この物語の内に閉じることはない。

○

私の物語を紡いだ。

この物語の先が
様々にひらけていくことを願い
仮の幕を閉じる。

(了)